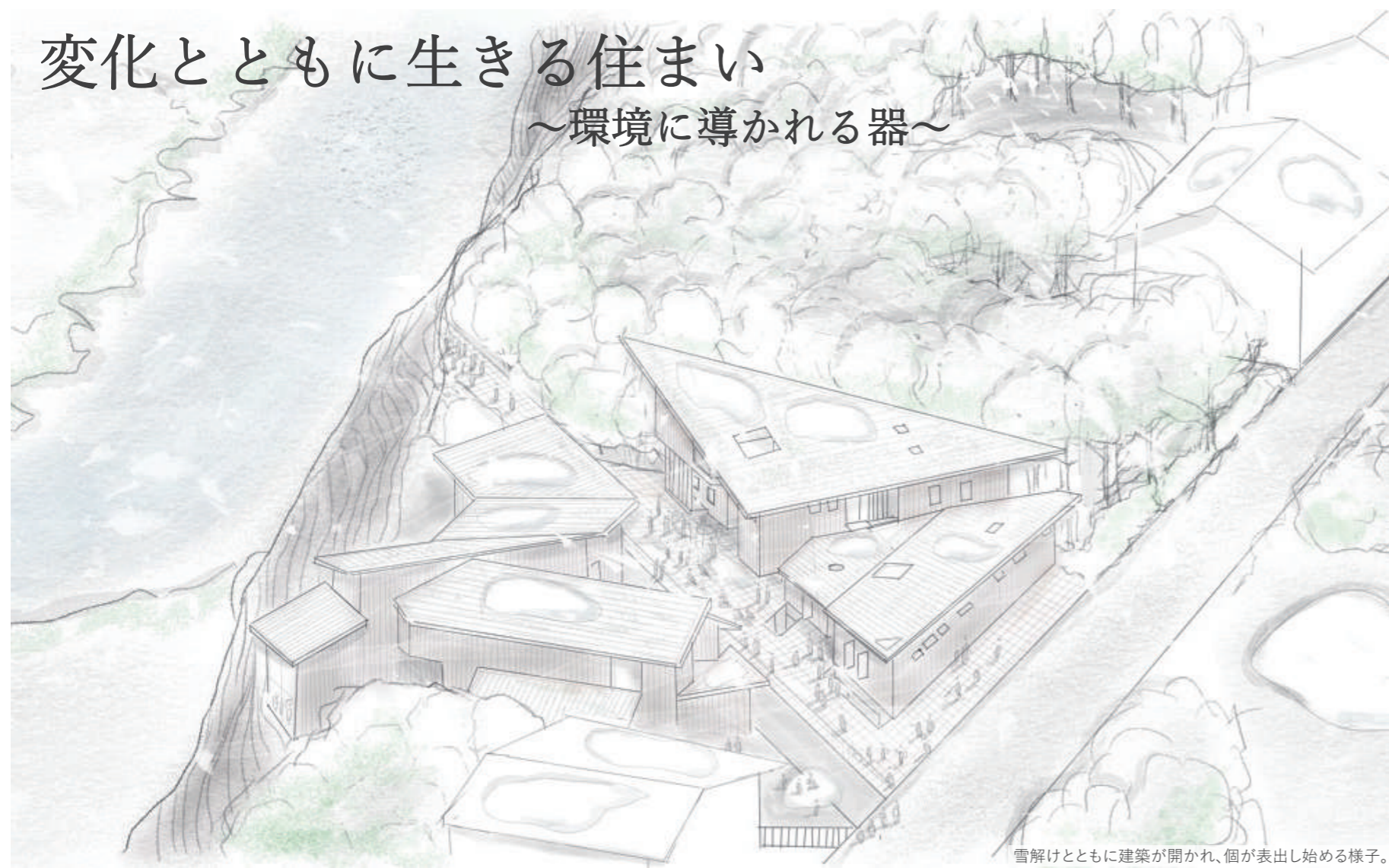


変化とともに生きる住まい

～環境に導かれる器～



雪解けとともに建築が開かれ、個が表出し始める様子。

私たちは「その地(津南町・十日町市)の未来をつくる建築」とは、「他律的な建築」と考える。

他律的な建築とは、社会や環境の変化といった多様な外部要因に対し、抵抗するのではなく、柔軟に変容し続ける建築である。そのような柔軟性こそが、未来を担う建築に求められる本質的な条件であると考えます。

津南町は日本有数の豪雪地帯であり、これまで雪は一般的に取り除くべき存在とされてきたが、本建築では雪を排除せずにあえて集める「雪スポット」を設けることで、水の循環の一部として暮らしに取り込む。そして、冬には建築を外部に対して閉じることで住人は個としての生活を深め、春の雪解けと同時に建築は開かれ、住人の活動も外へと広がり、コミュニティとしての生活が生まれる。

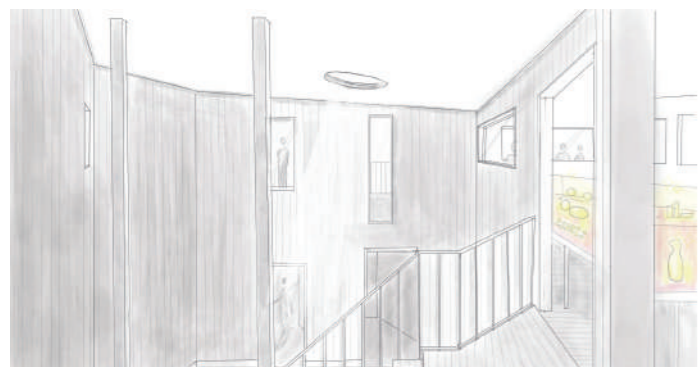
こうした土地の風土・住民の個性に子どもたちが触れることで、津南町の魅力を知り、将来この町で暮らすきっかけとなることを目指す。

他律的な建築

1. 地形や周辺環境といった、土地固有の条件に導かれる建築
2. 季節の移ろいに設えが応答し、建築の空間構成が変化する建築
3. 住み手の入れ替わりにより、空間の秩序が再編されていく建築

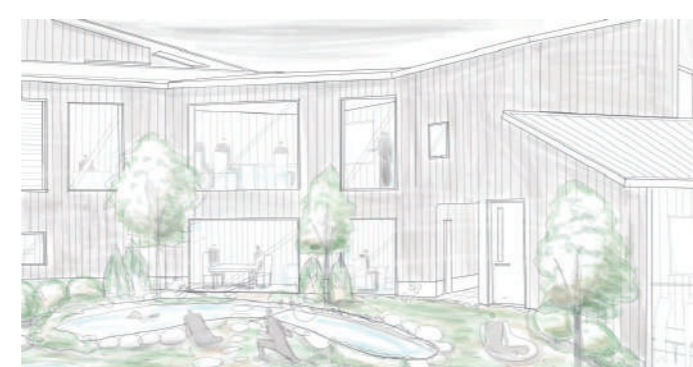
アクセント

・住人たちが日常の中で自然に関わり合い、それぞれの個性が重なりながらコミュニティが形成されていく



SE邸①:軸線と吹抜に面して貴金属室を配し、趣向が外部・住戸全体に表出。

・コミュニティでの時間が子どもたちの記憶の中に残り続け、受け継がれていく



NW邸①:子どもたちの遊び場であるピオトープは記憶の原風景を作る。

他律的な建築

+

アクセント

||

この地の未来をつくる建築

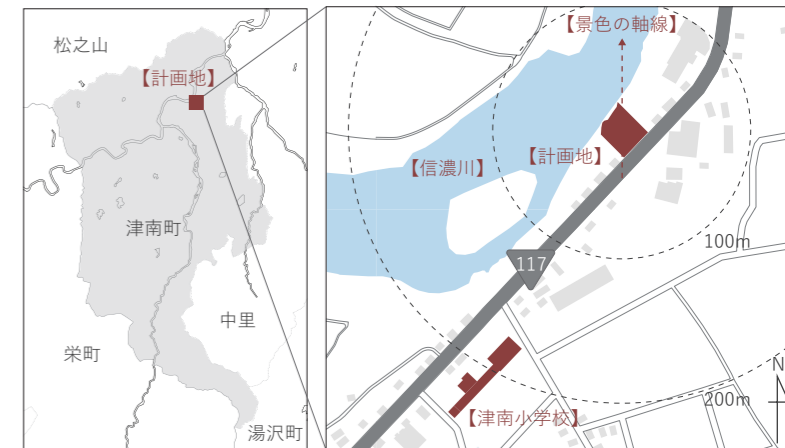
選定敷地：津南町

・河岸段丘沿い

快適な住環境の確保や水の循環、河岸段丘の特性を生かすため、信濃川の眺望に優れた段丘沿いの立地とした。

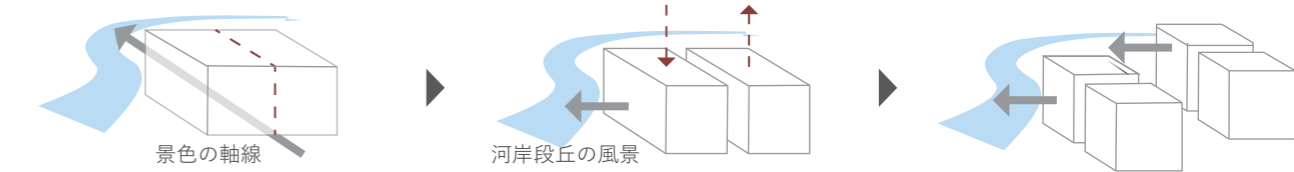
・津南小学校に隣接する

地域や子どもたちの交流を促すため、地域の拠点である津南小学校に近接させた。



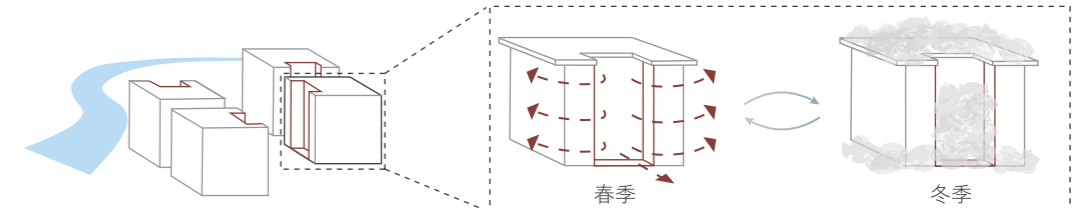
ダイアグラム

ボリューム



津南町のシンボルでもある信濃川の景色に軸線を通し、各住宅から河岸段丘を眺望できるように高低差を付ける。

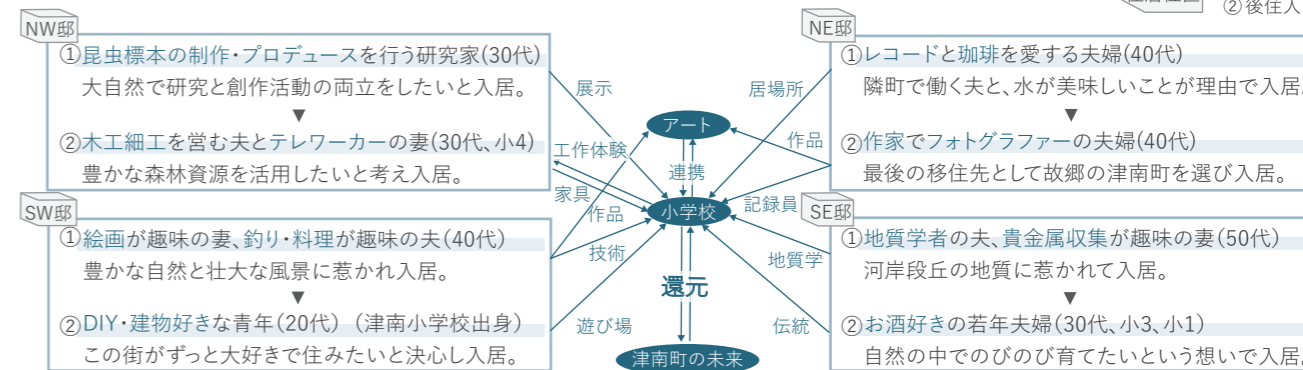
雪スポット



各建物には雪スポットを設け、冬季には雪をためることで建物を外部に対して閉ざし、個としての生活を深める。春季には雪が解けると同時に建築が外へ開き、住人の活動も外へ広がる。

住人の個性

津南町に縁のある人々が集い、そして住み継がれるコーポラティブハウスとして計画する。各住人の個性が溶け合い津南小学校と連携することで、子どもたちへと未来を紡ぐ津南町らしさの拠点を創る。

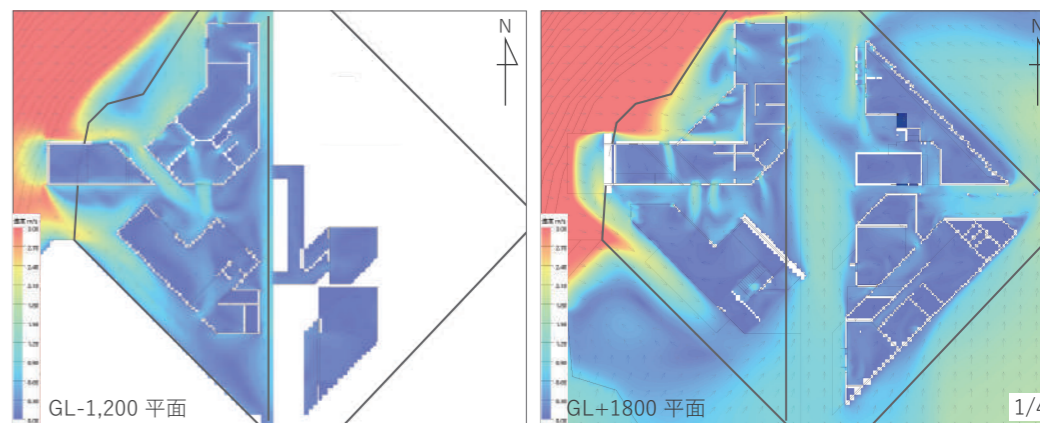


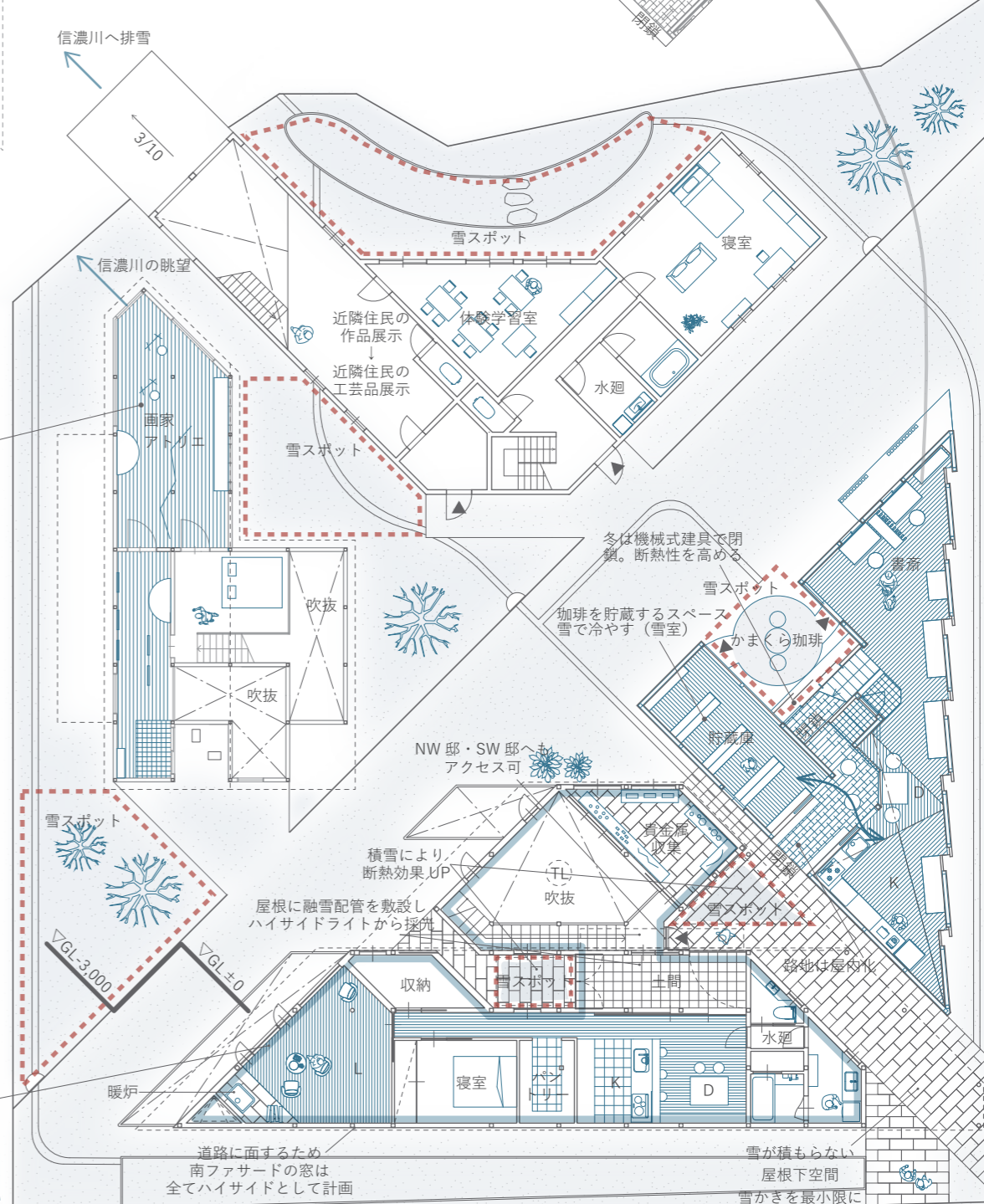
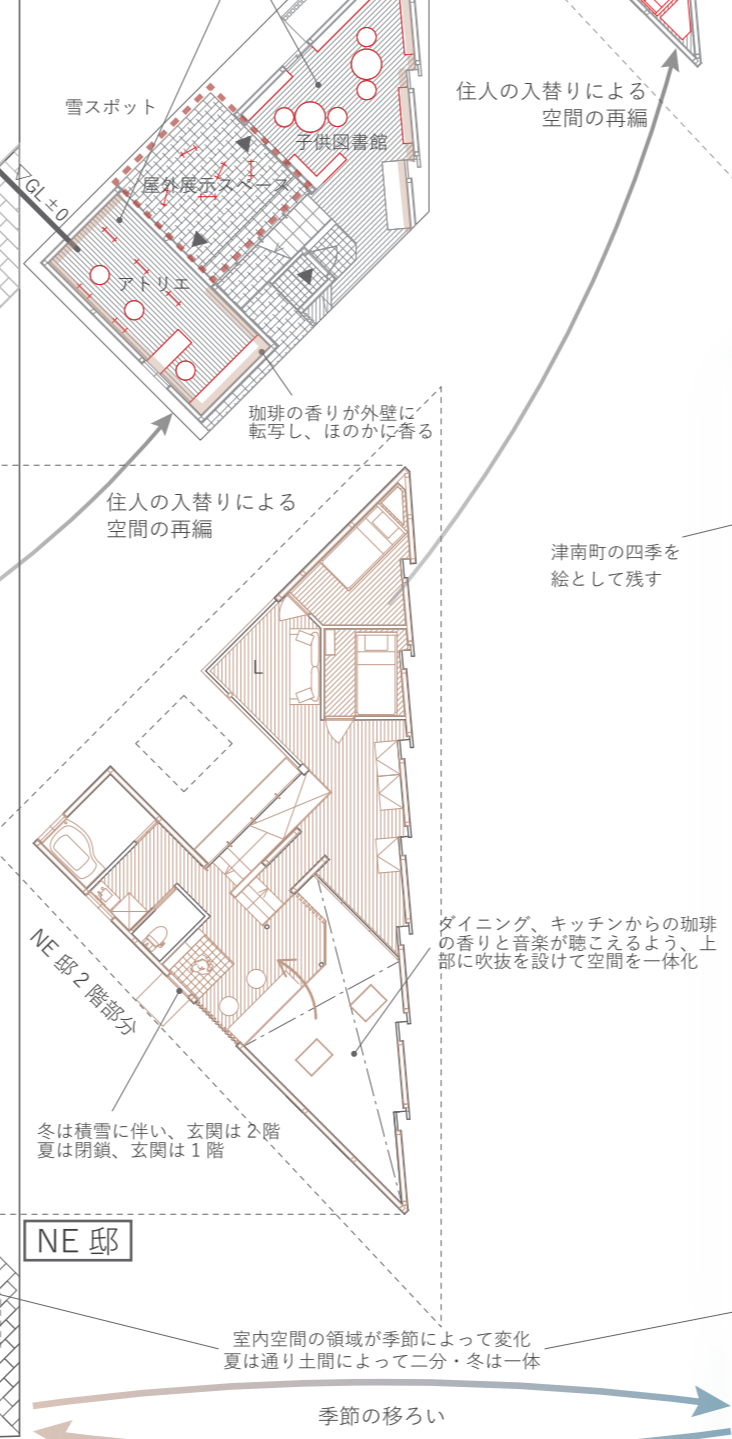
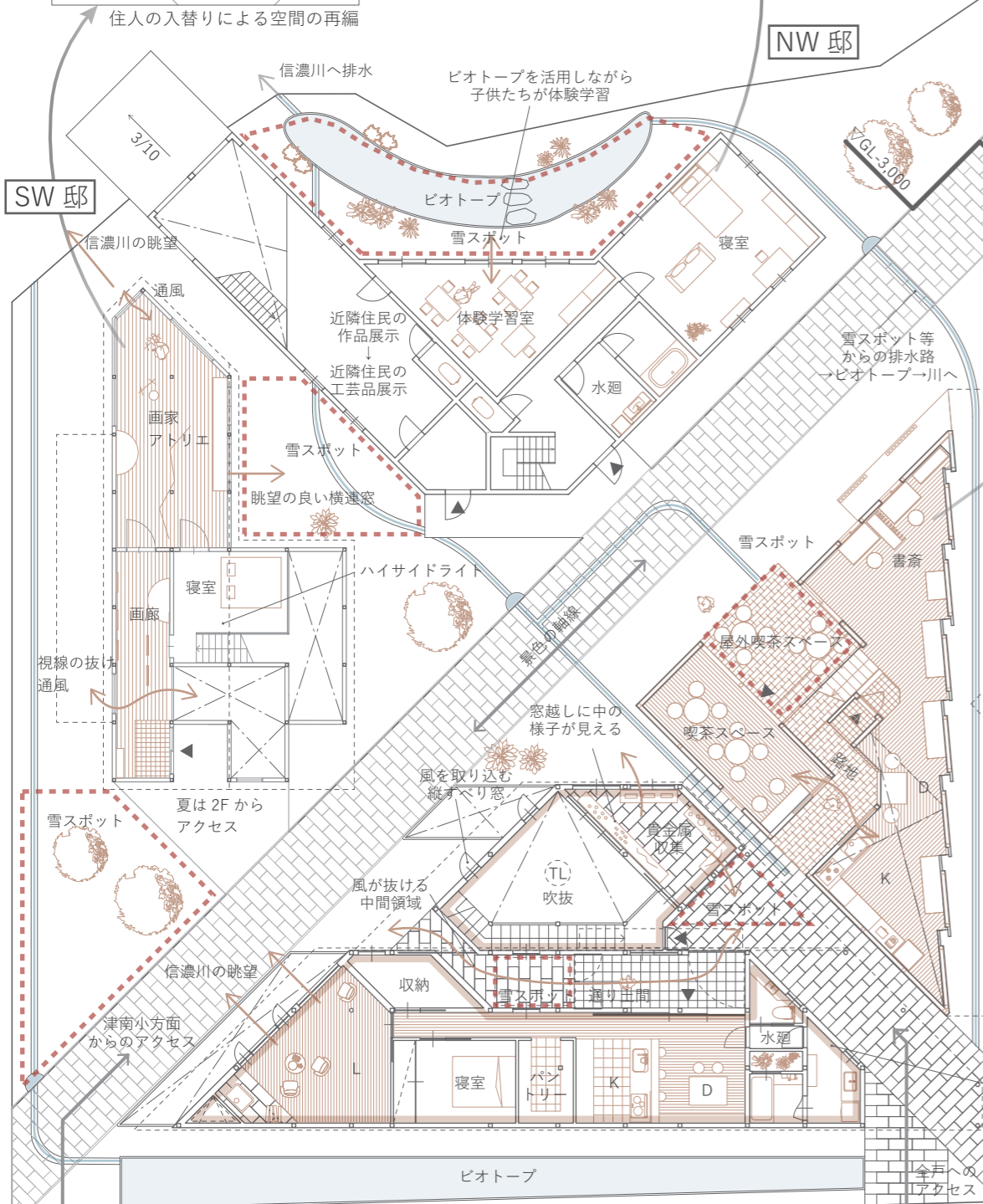
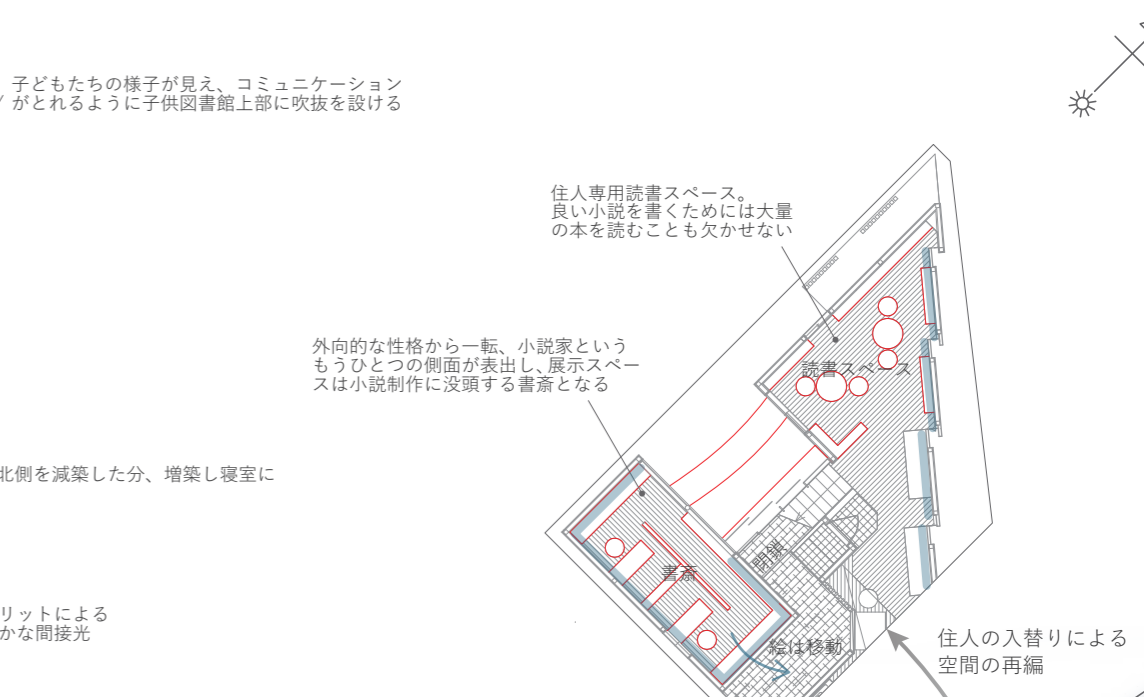
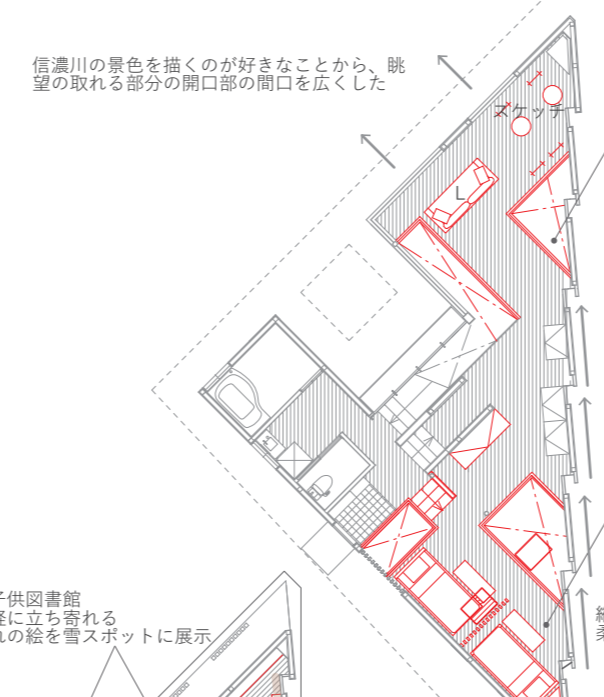
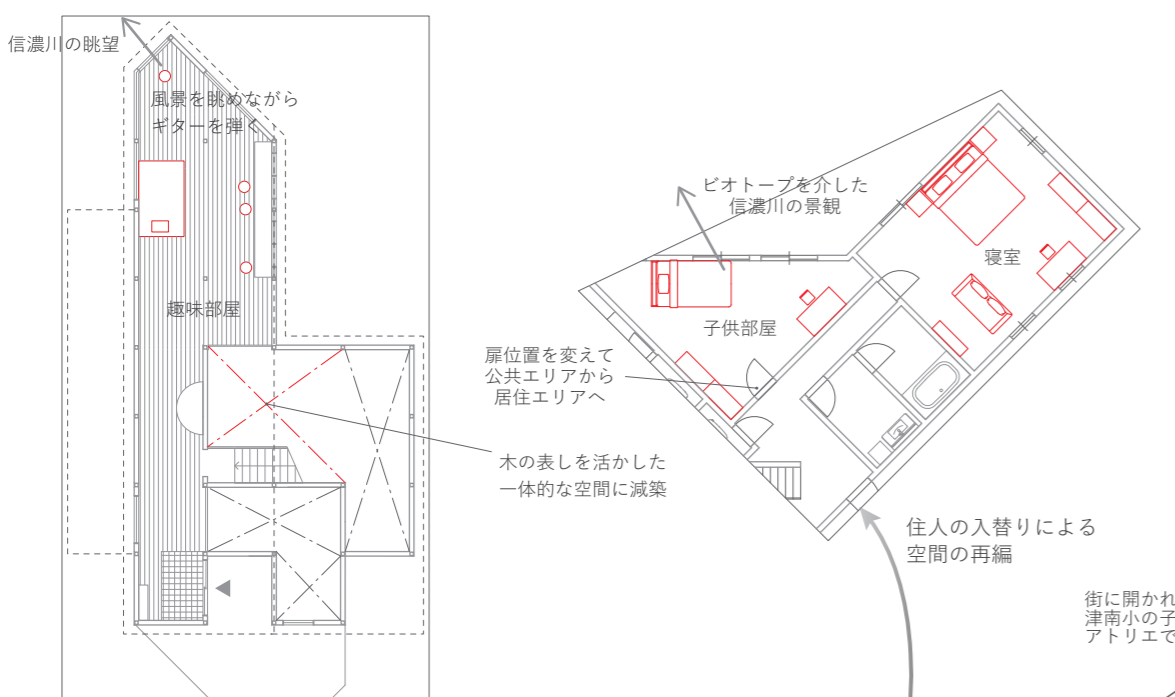
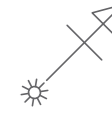
風環境シミュレーション

CFD解析により風環境の確認を行った。図は西からの風がある場合の、各住戸の屋内外の風環境を可視化したものである。

・NW邸のボリュームを、信濃川に面して逆くの字形に設けることで、西からの風が強風時にも、本敷地へと流れ込む風速が抑えられた穏やかなものにする事ができる。
・各ボリュームの間、つまり景色の軸線や路地は風が抜ける風の通り道になっており、各住戸へ満遍なく自然風を供給することができる。

環境的にも互いに良い影響を与え合う計画である。





NW 邸・SW 邸 2 階平面図, NE 邸・SE 邸 1-2 階平面図 夏 S=1/200

SE 邸

NW 邸・SW 邸 2 階平面図, NE 邸・SE 邸 1-2 階平面図 冬 S=1/200

